
勝利の女神を喚び出せば

ナリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勝利の女神を喚び出せば

【Nコード】

N5856Z

【作者名】

ナリ

【あらすじ】

いきなり召喚されました。と思ったら失敗？ ……え？ 用無し？

召喚ファンタジーのような、おっさんとの恋愛話のような。（

中編）

事の始まりはこうだ。

上司から仕事の呼び出しを受け、急いで家を出た瞬間、ぐんと体が下に引つ張られるような感覚がした。

そしてハッと気づいた時には、私は見知らぬ場所で、見知らぬ人々に囲まれていたのだ。

後で分かる事だけど、その時私はクロツカという国のお城の広間に召喚されていたらしい。周りにいる人たちは、王様や大臣といった偉い人と、彼らを守る兵士たちだった。

「おお、本当に成功した」

「召喚が成功したぞ！」

大臣つばいお爺ちゃんたちが興奮気味にささやく。

突然違う世界へ来て呆然としていた私だったが、瞳だけはせわしなく動かして、自分の置かれた状況をなんとか把握しようとしていた。

私の足元には召喚陣らしきものが描かれており、正面を見上げれば、玉座に座った王様がこつちを訝しげに見つめている。

「我らの呼びかけに、アプロディーテ様が応じて下さった」

感動したように言うお爺ちゃんたちの言葉を、王様がさえぎる。

「待て。こんな小娘がアプロディーテとは思えん」

『小娘』だと？

私はむつと顔をしかめた。

「おい、お前」

不遜な態度で王が言う。まだ年も若く、金髪碧眼のイケメン王だけど、こちらを見下しているような口調や表情がいちいちカンに触る。

人の性格というのは、結構しぐさや雰囲気に出るものだ。この王様からは高慢で自己中な匂いしかない。

「お前は本当に”勝利の女神” アプロディーテか？」

その質問に、私は目を丸くした。

勝利の女神アプロディーテ？ ……え、誰が？

きよろきよろと周りを見回しても、広間の中心には私しかない。王様の視線もしっかりとこちらに向けられていて……

私が勝利の女神？ まさか！

「女神だなんてめっそうもない。私はそんな崇高な存在ではないです」

慌てて否定する。訳の分からないまま召喚されたかと思えば、女神に間違われるなんて。

「お前はアプロディーテではない？」

「はい、違います」

再度、王様から問われて、私は大きくうなづいた。

すると今度は、彼の眉間に深いしわが刻まれる。片眉をつり上げて私の一番近くにいた中年のおじさんを睨みつけると、

「貴様、失敗したな？　ただの人間の小娘を召喚して、どうして戦争に勝てるというのだ。私は勝利の女神を喚び出せと言ったはずだ。隣国シロルとの戦争に勝てるように、勝利の女神を喚び出せとな」

冷たい口調で責めた。責められたおじさんは顔を青くしながら言う。

「し、しかし陛下……私も召喚術などというものを使うのは初めての事ですし……」

彼の弱々しい言い訳を聞いていくと、どうやら召喚術というのは、この世界でも特にポピュラーな術ではないらしいという事が分かった。

なんでも最近見つかった五百年前の文献の中に『勝利の女神を喚び出して戦争に勝利した』という記述とともに、召喚のやり方が書いてあったのだとか。

そしてそれを見た王様が、「やってみせろ」と臣下のおじさんにムチャぶりしたようだ。そりゃ無理だよ。

尋常じゃない冷や汗を流しながら言い訳を続けるおじさんを見て、私は少なからず同情の念を覚えた。

召喚術なんて本当にできるかどうかも分からないものだったんだから、私を喚べただけでも褒めてしかるべきじゃないか。

ただのおじさんが召喚術使ったんだよ。すごいよ、このおじさんは。

しかしそこで、私はハッと我に返った。

見知らぬおじさんに同情している場合じゃない。本当に可哀想なのは、その召喚に巻き込まれた私ではないか、と。

何だか急に怒りが込み上げてきて、思わず王様に「私を元の世界に帰してください」と詰め寄ろうとした時だった。

「どうかお許しを、どうか……ぎゃあああ！」

野太い悲鳴が耳を突く。

真っ赤な血しぶきが、私の視界を汚した。

「失敗は失敗だ。使えぬ家来などいらん」

辛辣に吐き捨てる。私の目の前で、おじさんはすでに息絶えていた。

王様から命令を受けた兵士が、召喚に失敗したおじさんを容赦なく斬り捨てたのだ。

恐怖のあまり叫び出しそうになったが、喉がつかえて声が出ない。体から血の気が引いていく。

どうしよう。私、とんでもないところに来てしまった。ここは私がいいた平和な世界とは違うのだ。

今更ながらそう実感して、細かく体が震え出した。

「さて、では、勝利の女神でもなんでもないお前をどうするか」

玉座の王が氷のような瞳で私を見下ろし、言った。

勝利の女神アプロディーテと間違われて召喚され、このクロツカ国にやって来てから3ヶ月。

私は一応、まだ生きてます。

私を喚び出したおじさんは殺されちゃったし、元の世界に戻ることもできないまま、お城の片隅でひっそりと日々を過ごしてきたのだ。

不遜な王様とは、あの時以来会っていない。会いたくもないけど。

うわさでは、王はもう召喚術で女神様を喚び出すのは諦めたようだった。大昔の文献に載っていただけの不確かな術だったし、それに時間をかけていられないと思ったんだろう。

まだ本格化していないとはいえ、このクロツカ国は今、隣国のシロルと戦争中なのだから。

「夕食をお持ちしました」

静かな声とともに扉が開く。料理の乗ったカートを押して、ひとりの侍女さんが部屋の中に入ってきた。

私はあの王様に殺されはしなかったし、一応この城の中に置いてもらえているけれど、特別に良い待遇を受けているわけでもない。

私にあてがわれた部屋は城の中の一室だけあって広いものの、簡素なベッドとテーブル、椅子があるだけの寂しい部屋だった。北側にあるのか日が入らず、昼間も薄暗くて、ちよつと素敵な監獄みたいなところだ。

何度か挑戦してみたけれど、扉の外には見張りの兵士がついていて逃げ出すこともできない。

私はため息をついて椅子に座り、テーブルに乗せられていく料理を眺めた。城で働く使用人たちの食事とほとんど変わらないと思われる、つつましいメニューだ。まあ、ごはん貰えるだけマシかな。

この城の人たちは、私の処遇を考えあぐねているようだった。”
勝利の女神アプロディーテ”でないなら用はないけど、召喚術のことをペラペラ喋られても困るので、簡単に城の外に放り出す事もできないのだろっ。

それに大臣などの偉い人の中には、『召喚術で出てきたのだからやっぱり』勝利の女神”としての資質はあるのでは？』と期待している人もいるみたいだった。

この3ヶ月で色々やらされたもんない。

私に軍師としての才能でもあると思ったのだろうか、地図を広げられて「どう戦ったら勝てるか」などと戦略を聞かれたり、戦に勝てるような方角や時期を占ってみると言われたり、あげくの果てには剣を持たされて、兵士たちの訓練に放り込まれたり。

だけど私には戦術の事はさっぱり分からないし、占いだってできない。もちろん敵を百人も千人も斬って、この国を勝利に導けるほどの剣術も体力も運動神経もない。

ここへ来るまで、私は平和な世界で戦争とはかけ離れた生活を送っていたのだから当たり前だ。

「大丈夫ですか？」

食事を運んでくれた侍女　マリンさんが、うつむいていた私の顔をそつと覗き込んで言った。

心配をかけてはいけないと、私は笑顔を作る。

「大丈夫です、考え事してただけなので。ありがとうございます」

「食事、全部召し上がってくださいね。体力をつけないと」

マリンさんは優しく言つて、部屋を出ていった。私の世話をしてくれる侍女さんは3人いて、交代で食事の用意やら部屋の掃除やらをしてくれるのだが、マリンさんは何かと私のことを気にかけてくれる。

私が他の世界から間違つて召喚されたという事を知っていて、不憫に思つてくれているのだ。

ちなみに他の侍女さん2人は何だかツンとした雰囲気で、用事がある限りは話しかけてこない。

マリンさんがいてくれたおかげで、私はこの3ヶ月何とかやつてこれた。彼女の優しさに触れていたから、見知らぬ土地で独りぼちでも精神をまともに保ててきたのかも。

なんとつてこの城にいる人々は、あの独裁的な王様をはじめ、自分たちの保身に必死な大臣たちなど、自己中心的な人が多いから。私が会話した事あるのはこの城にいる一部の人だけだが、権力を持つている人ほど、性根の曲がった嫌な人が多かった気がする。

そしてそんな腐った人たちの手に、私の命運も握られているのだ。薄味の食事を黙々と口に運びながら、どうにかしてここから逃げられないかと思案した。

よくも悪くも事態が動いたのは、それから1週間後の事だった。昼食を食べた後、する事もなくぼーっとしていると、ノックも無いきなり部屋の扉が開いた。ドカドカと床を踏み鳴らして入ってきたのは、王様と彼を守る近衛兵、そして大臣たちだ。

「な、なんですか？」

私は椅子から立ち上がり、身構えた。

最近毎日のように脱走しては見張りの兵士に見つかって連れ戻されてるから、いい加減、王様の方にも報告が上がったのかもしれない。

王様は尊大な態度で言った。

「お前の処遇が決まった」

その言葉に、私の背筋がひやりと凍る。

もうそろそろ来る頃だと思っていた。この3ヶ月で色々やらされて、私が勝利の女神でないことは裏づけられたから、正式に用無しになったのだ。

そしてその用無しをいつまでも城に置いておくほど、この王様は甘くない。

「アプロディーテではないお前に、もはや存在価値はない。……これを受け取れ」

王のふところから取り出され、こちらに投げられたのは、紫の液体が入ったガラスの小瓶だった。

「なんです、これ？」

顔をしかめて言う。

答えは何となく分かっていたけど。

王様はフツと口角をつり上げて笑った。

「毒だ。それを飲んでさっさと死ね。言っておくが、これは私の慈悲だぞ。その毒はゆっくりと体に作用し、眠るように死んでいける。苦痛を伴わずにな」

手の中の毒薬が、ずんと重みを増した気がした。

王様は続ける。

「普通なら問答無用で斬り殺すところだが、お前は我々の召喚に巻き込まれたただけだしな。これくらいの情けはかけてやるうかと思っただ」

目の前にいる王様が、どうしてこんなに横柄な態度をとっているのか分らない。

相手の事を責めて、許すか許さないかを決める権利を持っているのは、私の方だと思っていたんだけど。

だって召喚なんて言って、やってることは誘拐と同じじゃないか。おまけにそれに対して謝罪もせずに、用が無いから死ねだなんて。

こんな理不尽なことってない。

私はわざとゆっくりとした動きで、小瓶を握った手を上げた。腕を伸ばし、王様に向かって拳を掲げる。

王様に大臣に兵士たち、この部屋にいる全員の視線を感じながら、私は握り込んでいた指を広げた。

「こんな毒は必要ありません。私、死ぬつもりなんてないので」

毒薬の入った小瓶は私の手から滑り落ちて石の床にぶつかり、パリンと高い音をたてて割れた。紫の液体がとろりと広がっていく。王様は一瞬目を見開いた後、口元を引きつらせながら笑って言った。

「そうか、毒は必要ないか」

と、そこでぐんと声を低くする。

「ならば痛みにうめいて死ね」

王様がぱちんと指を鳴らすと、隣に控えていた兵士のひとりが静かに歩み出てきた。腰の剣に手をかけて、私の方に近づいてくる。私がこの鍛えられた兵士に勝てるなんて思っていない。けどまだ死にたくないから、みつともなく抵抗してやる。

今まで誰かを殴った事なんてない私だったが、今は妙に闘志に燃えていた。アドレナリンが出てハイになっているのだろうか、あわよくば王様の顔面に1発ぶち込むぞ、と物騒な事まで考えていた。

すらりと剣を抜いた兵士を、ぎろりと睨み上げる。視界の端で王様がニヤニヤと笑っているのが気に触る。

私が動物だったなら、きつと今、毛を逆立たせてうなり声をあげているに違いない。

おかしいな。私はこういう時、可愛く震えて涙をこぼすようなキヤラだと自分で思ってたんだけど。

兵士が剣を振り上げて床を蹴る。私は目をつぶらなかつた。だっ

てそんな事したら、剣を避ける事ができなくなるじゃないか。

が、剣は私に届く前に止まってしまった。
キーンという甲高い音が部屋に響く。

「……!？」

私は目を丸くして固まった。
だって私と、私を襲おうとした兵士との間に、いきなり第三者が
立ちはだかったのだから。

「お嬢さん、意外と気が強いねえ」

私をかばって剣を抜き、兵士の攻撃をさえぎったのは、

「ま。おじさん、そういう子好きだけど」

やけにのんびりとした空気をまとった近衛兵のひとりだった。歳
は30代後半くらいで、私にとっては確かにちよつとだけおじさん
だ。

しかし今はそんな事どうでもいい。彼も他の兵士たちと同じく、
王様側の人間のはず。

なのにどうして私をかばったんだろう。

「何のつもりだ、グルド」

王様が冷えた声で言った。苛立っているのか、こめかみがピクピクと痙攣している。

私を助けた近衛兵　　グルドさんは、ずっと目を細めて笑った。

「いやあ、彼女が殺されなきゃならない理由が見つからなかったもんで」

口調は柔らかだが、その声は低く、迫力があつた。私をかばうように立っている彼は、背が高く筋肉質で、ゆるいくせ毛が特徴の黒髪だ。

この人の事は今までも何度か見たことがある気がする。自分の身を守るため、近衛兵を常にそばに置いている王様だから、私が召喚された時にも、あの広間にいただろう。

もしかして剣の才能があるのではないか、と私が兵士たちの訓練に放り込まれた時にも会っていたと思う。上官なのか、若い兵士たちを指導していたはずだ。

だけど、今まで何度か顔を合わせていても、彼は私に興味のあるそぶり、あるいは同情しているようなそぶりなんて見せなかったのに。

なのにどうして今、こうやって助けてくれたのだろう。

王様の命令を受けて私を襲おうとした兵士は、グルドさんの妨害を受けて数歩下がった。グルドさんは剣を構えたまま、堂々とした

態度で王様と向かい合う。

「望んでもないのに召喚されて、知らない人間だらけのこの国にやって来たのに、勝利の女神じゃないなら用無しだと切り捨てられるなんて、あんまりだと思ひまして。あんたらが謝罪する必要はあつても、彼女が死ぬ必要はないでしょうよ。今まで黙って見てましたが、今回は口を出させてもらいますよ」

逆らわれたことが気に食わないのか、王様は厳しい顔つきでグルドさんを睨んでいた。他の兵士や大臣たちは、「なんて馬鹿な事をするんだ」という表情をして、自分たちにとばかり来ないかと怯えている。

私も自分の事を差し置いて、「この人こんな事して、これからどうするつもりなんだろう」とグルドさんの心配をしていた。この王様に楯ついて、無事でいられるとは思えない。

「グルド、貴様がそんなに馬鹿な奴だとは知らなかった。お前はいつから私に説教できるほど偉くなったんだ？ そんなに死にたいのなら、その小娘もろとも殺してやろう」

王様の言葉を受けて、部屋にいた10人ほどの兵士たちが一斉に剣を抜いた。大臣たちは慌てて隅の方へ後退していく。

じりじりと近づいてくる兵士たちを牽制するように、グルドさんが剣を握り直した。

「私の近衛兵に採用したくらいだから、お前が強いのはよく知っている。しかしさすがのお前でも、10人の兵士を相手にするのは厳しいのではないか？」

王様がしたり顔で笑うと、グルドさんも困ったように笑った。

「まあ、そうですね。10人はきついなあ」

認めるなよ！

私は心の中でつつこんだ。そこは嘘でも余裕だと言ってほしい。
王様はさらに笑みを深める。

「もしお前とその小娘が私への非礼を詫びるというのなら、命だけは助けてやらんでもないぞ。床に頭をこすりつけて土下座し、私の靴を舐めてみせろ」

そう言つて、王様は自分の右足を一步前に出した。

グルドさんはゆるくほほ笑んで、後ろにいる私に声をかけてくる。

「どうする、お嬢さん。靴を舐めて許しを請うか、反抗しておじさんと一緒にここから逃げるか」

「おじさんと逃げます」

速攻で答えると、グルドさんはフツと笑って剣を鞘に収めた。

「よろしい」

これからこの兵士たちを倒して逃げなきゃならないのに、どうして剣を仕舞うの？

私がそんな事を思っていると、グルドさんは敵の兵士たちに背を向け、素早くこちらに走りよってきた。その勢いを落とさぬまま私のお腹に腕を巻きつけ、抱き上げる。

「きゃあー！」

肩の上に乗せられて、視界が反転した。

何だ、何だ?? 私を抱えてどうやって逃げるつもり?

私が混乱している間にも、グルドさんは動きを止めなかった。人ひとり抱えているとは思えないくらい俊敏に、兵士や王様がいるのとは反対の方へ部屋の中を駆けていく。

ちよつと待つて。そっちにあるのは……

「逃がすな!」

後ろで王様が叫ぶ。兵士たちの足音が近づいてきた。

グルドさんの目の前にあるのは大きな窓。この国では窓は基本的に開いたままで、雨が振った時や夜の間だけ木戸を閉めておくのだ。つまり、太陽が眩しい真っ昼間の今、窓は開放的に開け放たれていて

「ここ3階——っ!!!!」

悲鳴の代わりにそう叫びながら、私はグルドさんに抱えられたまま窓から飛び出していた。

死ぬ、死ぬ! 地面に体ぶつけて死んでしまう!

グルドさんの服をぎゅっと握った。全身に強い風を受けて、胃がひっくり返るような感覚がする。

かと思うと、次の瞬間にはもう、私たちは地面に着地していた。

正確に言えば、枝をバキバキに折りながら庭の低木の上に落ちっちていた。

「いたたた」

落ちた衝撃で頭がくらくらする。しかしどこも怪我はしていない。骨も折れてないし。

クッションになってくれた低木のおかげか、と、体を起こすと、私の下に倒れていたグルドさんと目が合った。

あ……。クッションになってくれたのは低木だけではなかったらしい。

「だ、大丈夫ですか？」

「ん、ダイジョブ」

心配したけれど、グルドさんも特に怪我は無いようだった。服についた葉っぱを払いながらゆっくりと体を起こす。

上を見上げると、3階の窓から兵士たちがこちらを覗き込んでいた。追わなきゃならないけど落ちるのは嫌だし、といった感じで迷っている。

「すぐに追えッ！ 早くしろ、グズどもッ！」

と、その窓の奥から王様の怒鳴り声が聞こえた。逃げられた怒りと焦りがにじんでいる。

べーだ、ざまあみろい！

私が窓の方に向かって舌を出していると、

「可愛いけど、今はまだその舌仕舞うときなさい。完全に逃げ切るまでは安心しちゃだめだよ」

グルドさんは私の腕を掴んでまた走り出した。足を動かしつつ、指をくわえてピューイと笛を鳴らす彼を、「何してるんだろっ？」

と思いつつ見つめる。

今の私は、裾がすねの辺りまであるドレスを着ていた。普段着用のもので、らしいけど、ドレスなんて着慣れない私には動きにくくて仕方がない。元の世界ではもう少し身軽な恰好をしていたのだから。靴はヒールのあるブーツだし、このまま走って逃げるのは無理がある。

グルドさんに、「一旦どこかに隠れませんか？」と提案しようとした時だった。

どこからか荒々しいひづめの音が響いてきたかと思うと、突如として、目の前に大きな黒い馬が飛び出してきたのだ。グルドさんがさっき鳴らした指笛は、この馬を呼ぶためのものだったらしい。

「馬に乗ったことは？」

「ありません！」

走って馬に近づきながら言う。

「分かった、前に乗って」

グルドさんは自分が馬に乗った後で、私を鞍の上に引き上げてくれた。

うわわ、馬の上って結構高い。

「いたぞ！」

城から出てきた兵士たちが、剣を手にこちらへ駆けてくる。

「鞍を掴め」

グルドさんは私にそう言いながら、自分は手綱を握って、馬の腹を蹴った。

「待て！」

人の足では馬には勝てない。走り出した私たちと兵士たちとの距離はどんどん開いていく。

「開ける！」

突然、グルドさんが前に向かって叫んだ。そこには侵入者を防ぐ大きな門と、それを守る警備兵たちがいたのだ。

「え、あ、近衛の……」

警備兵の何人かは、グルドさんの顔に見覚えがあったようだ。

「急げ！」

「は、はい！」

グルドさんの迫力ある声に急かされて、警備兵は慌てて門を押し開けた。彼らはグルドさんと私が王様に逆らったことなんて知らないもんな。

「開けるな！」

追って来た兵士たちが後ろで叫んでいるが、もう遅い。私たちが乗った黒毛の馬は、すでに門の外へと飛び出していた。

城を出てからずっと、グルドさんが馬の速度を緩めることはなかった。結構お尻が痛いんだけど、いつ追っ手に見つかるかも分からない状況で「ちょっと休みたいです」なんて言えるわけもなく。

グルドさんも私のお尻事情に気づいているようだったけど、

「なるべく城から離れたいんだ。もうちょっと我慢してくれ」

と励まされた。

大丈夫。見つかつて殺されるのは嫌だし、お尻の痛みくらい我慢します。

というか今はそれよりも、グルドさんとの密着具合のが気になったりして。

逃亡中にこんなこと考えるのもなんだけど、落馬しないようにとグルドさんは片腕を私のお腹に回しているので、後ろから抱きしめられているような感じがして恥ずかしいのだ。

私は今まで、異性とこんなに近づいたことなどなかった。元の世界でも女性と接することの方が圧倒的に多かったし。

グルドさんと密着している背中が熱くてたまらない。心臓が爆発しそうだ。

「大丈夫か？」

鞍を掴んでうつむいていたら、グルドさんが私の耳元にそっと唇を寄せてささやいた。

「だ、大丈夫ですっ！」

慌てて顔を上げたせいで、私の頭がグルドさんのあごにヒットする。

「痛い……」

「すいません、ごめんなさい！」

顔を赤くしながら、あわあわと謝罪する。

「石頭だねえ……えっと、そっぴや名前を聞いてなかったな」

グルドさんは片手で手綱を操りながら、彼のあごとぶつかった私の頭を撫でてくれた。

優しいな、この人。

「あ、私チノと言います」

「チノちゃんか、やっぱり珍しい名前だな。聞き慣れない響きだ。チノちゃんはこのことは別の世界に住んでいたんだろう？」

「ええ、そうです。ここよりずっと平和で穏やかなところです」

質問に答えながら、自分がいた世界を思い浮かべて泣きそうになった。優しい友達、尊敬する母、彼女たちにはもう会えないのかな。暗く沈みそうになる思考を、今は悲嘆にくれている場合じゃないと切り替えて、話題を変えた。

「これから私たちどうすればいいんでしょう？ グルドさんは今、どこへ向かって馬を走らせてい……ッ！」

痛いつ！ 舌噛んだ！

馬に乗りながら喋るのは危険だ。

そんな私を見て、グルドさんは笑う。

「気をつけて。行く当てはあるよ。詳しいことは馬を降りてから話そうか」

それからしばらく、私たちは黙ったまま走り続けた。私は背後のグルドさんの体温にドギマギしつつ、通り過ぎていくこの国の景色をじっと眺めていた。

今までずっと城の中にいたから、外の様子は分からなかったし。

城に近い町は大きく、人通りも多かったけど、活気はなく静かだった。みんな暗い顔をしていたのも印象的だ。

城から離れていても町の様子に大きな変化はなく、むしろひどくなっていた。ボロボロの服を着て無気力な顔をしている人や、やせっぽちの子供たちを何度も見た。

城にいる王様や大臣たちは派手で豪華な衣装を着て、きらびやかな宝飾品をたくさんつけていたのに。

私の世話をしてくれていた侍女のマリンさんに戦争のことを聞いたとき、「この国はいつそ負けてしまった方がいいのかもしれない」と、独り言のように呟いていたことを思い出した。

クロツカ国の政治は立ちいかなくなっているのかもしれない。あの王様が頂点にいるのだから、しょうがないとも言えるけど。

クロツカと戦争をしているというシロルはどういう国だろう。クロツカよりは良い国なんだろうか？

日が落ち、辺りが暗くなつてくると、私たちは馬を降りた。本当なら夜通し逃げたいところだけど、灯りなしに走るのは危ないし、馬も休ませなくてはいけないから、ひとけの無い森の中で野宿することになったのだ。

グルドさんは馬に積んでいた荷物の中から分厚い布を取り出して地面に敷くと、私をその上に座らせた。そして自分も隣に座り、「晩メシだ」と言つてパンとチーズ、リンゴを手渡してきた。

「……………」

「食わないのかい？」

ナイフでパンに切れ込みを入れ、チーズを挟みながらグルドさんが言う。

私は貰った食材と、馬に積まれていた荷物へ視線をやりながら聞いた。

「なんだか準備万端ですね。グルドさん、最初から私を助けて逃げてようとしてくれてたんですか？」

彼は私のパンを取り、同じように切れ込みを入れながらゆるく笑った。

「チノちゃんが殺されることは昨日の段階で決まってたからね。別に『絶対助けるぞ!』と思つてた訳じゃないんだけど、まあ、一応準備はしておくかと思つてね。君のことは前から気になつてた。間違つて召喚されるなんて哀れだと」

気づかなかつた。グルドさんが私のこと気にかけてくれてたなん

て。

何だか少し嬉しくなる。あの城の中には、マリンさんの他にも温かな人がいたんだなあ、と。

グルドさんはパンを私に返しながら言った。

「王の命令によって罪のない人間が殺されることは今まで何度もあったし、俺も黙ってそれを見過ごしてきた。今まで殺されたのは皆クロツカの国民だったからな。形だけでも忠誠を誓った王に殺されるなら、それもまた運命ってね」

私はパンやリンゴを膝の上に乗せたまま、黙って話を聞いていた。ランタンの揺れる灯りを受けて、グルドさんの顔は赤く燃えている。

「だけど君はこの国の人間じゃないでしょ。『死ね』というあの王の命令に従う義務はない。だから助けた。さっきも言ったように、直前まで助けるかどうかは迷ってたんだけどね。チノちゃん、毒薬投げ捨てて必死に抗おうとしてたからさ。助けずにはいらなかったのよ」

そこまで話を聞いて、そういえば助けてもらったことにお礼を言っていないかったと気づき、私は口を開いた。

「ありがとうございます。どんな理由でも、助けてくださって嬉しかったです。グルドさんは私の命の恩人です」

グルドさんは大人っぽい笑みを浮かべて私の頭をぐしゃぐしゃと撫で回すと、持っていたパンにかぶりついた。一口が大きいので一気に半分くらいなくなる。私はその豪快な食べっぷりに目を奪われつつ、自分のパンをかじった。

グルドさんは革袋に入った水を飲んだ後で言う。

「命の恩人だなんて言われると恐縮しちゃうね。俺に命を救われたなんて思わなくていい。タイミングも良かったんだよ。実は俺もそろそろあの国を出ようと思ったところだったから、そのついでにチノちゃんの事もつれて逃げたとでも思っておいてくれ」

「なぜ国を出ようと……？」

遠慮がちに聞くと、グルドさんはニツと笑って答えた。

「元々クロツカの人間じゃないからさ。俺はシロルの兵士だ。密偵として、クロツカにもぐり込んでただけのこと」

のんきに言うグルドさんに、私は目を見開いた。

彼はスパイだったのだ。

「もう10年近くはクロツカにいるな。うちの戦争が始まる前からクロツカ兵になりすまして、内情を探ってた。あの王はとにかく強い奴を自分の周りに置きたがるから、結構簡単に近衛まで出世してきたのよ。だが、そろそろ戦争も本格化してくるからと、シロルから帰還の命令が出たし、どのみちひと月以内にはクロツカを出るつもりだった。まあ、その場合はもつとひっそり逃げたけどね」

そう言っ、グルドさんはいたずらっぽく笑う。

彼はあつという間に自分の分の食事を平らげてしまったが、私はまだ3口しか進んでいなかった。少し急ぎ気味にパンをかじり、ほつぺたに詰めこみながら言う。

「そっか、グルドさんはシロルの国の人だったんですね。じゃあれから私たちはシロルへ逃げるんですか？」

私の質問にグルドさんはうなづく。

「そういうこと。国境を越えてシロルに入ればとりあえず安心だから、もうちょっと頑張ってくれよ。若い女の子は、こうやって野宿すんのも辛いだろうけど」

「うっん、大丈夫です。野宿くらい何でもないですから」
「いいコだねえー」

ふにやりと目尻を下げて、グルドさんがまた私の頭を撫でた。完全に子供扱いされてない？

「私、もう21歳なんですけど!」

「これは失礼、レディ」

グルドさんはわざとらしく言うと、胸に手を当てておじぎをした。なんかまともに相手されてない気がする。

馬に乗ってた時も、きつとドキドキしてたのは私だけなんだろうな。女としては見られてないのかも考えると、安心なような悲しいような、微妙な気持ちになった。

話題を変えよう。

「クロツカとシロルの戦争って、どっちが勝つと思いますか?」

あの王様や大臣たちの味方はしたくないから、私はクロツカは応援できないな。もちろん本当は戦争自体しないでほしいけれど、それは私の意志ではどうしようもない。

私が聞くと、グルドさんはあごに手を当て、少し悩んでから答えた。

「シロル兵としては、勝つのはシロルだと言いたいところだね。実際負けるつもりはないし。だが、客観的にみるなら……んー、五分つてとこかな。勝つか負けるかは本当に分からない。戦力が均衡してるんでね」

私はちよつと驚いて言った。

「そうなんですか。あの王様が一番上にいるんだから、クロツカは大したことないのかと思ってました。逆にシロルには、グルドさんみたいな優秀な人がいるんだし」

思ったことをそのまま言うと、グルドさんは照れたように頬を掻

いた。

「ま、俺はともかく、確かにシロルには優秀な兵が多いよ。だけどシロルはクロツカに比べると小さい国だからね。比例して人口も、兵の数も少なくなる。クロツカは玉石混淆の軍だが、とにかく人数が多いからな。精鋭ばかりでも少数のシロルは苦戦することになりそうだ」

自分がどれだけ平和な世界にいたのか痛感する。戦争が本格化したら、グルドさんも戦いに出るのだろうか。

「もしシロルが勝ったら、クロツカの国民はどうなるんですか？ 殺したりしないですよ？」

城にいた侍女のマリンさんの顔を思い浮かべた。彼女にも無事に戦争を生き残ってほしい。

「そんなことはしないさ。民間人はもとより、抵抗をやめれば兵士でも殺したりはしない。それにシロルが勝った方が、クロツカの国民も幸せになれると思うけど。うちの王はこの王ほど馬鹿じゃないし、今より生活は豊かになるはずだ」

「逆にクロツカが勝ったら？」

「最悪だね。シロル国民の多くが惨殺されると思うよ。俺がいた間にちよっとだけ矯正したけど、基本的にクロツカは兵の教育がなっていないから」

私は顔を歪めた。

「絶対に勝って下さいね」と訴えると、グルドさんは「そのつもりだ」とほほ笑む。

「それ、もう食わないのか？」

ふと視線を落として、グルドさんが言った。視線の先には、私のリンゴと食べかけのパン。

実はあまり食欲が無かったのだが、残すのももったいなくて、どうしようかと思っていたのだ。

「あの、お腹いっぱいになってしまっ……」

「じゃあリンゴはまた明日食うか」

グルドさんはそう言ってリンゴを仕舞った後で、私が持っていたパンの残りをひょいとつまみ、

「これは俺が始末しておく」

口に入れた。

「……！」

自分の頬が赤くなっていくのが分かる。グルドさんは何も考えていない様子でパンを咀嚼しているけど、それ私の食べさしだよ！？と動揺してしまう。

これって間接キスになるのだろうか？ 私がかじったものののに、汚いとか思わないのかな？

嫌いな人に対してはそんな事しないはずだから、グルドさんは私のこと、食べ残しを食べられるくらいには好意を持ってくれている？

……考え過ぎ？

とつくにパンを飲み込み、寝る準備を整えているグルドさんの横で、私は一人もんもんとしていた。自分の食べかけを男の人に食べられることが、何でこんなに恥ずかしいんだろう。

グルドさんはもつたいたないからパンを食べただけなんだ。特にその行為に意味なんてないんだから。と、自分に言い聞かせる。

「おいチノちゃん、そろそろ寝るよ」

グルドさんは地面に敷いていた厚めの布の上に寝転び、私を呼んだ。体の上にはもう1枚別の布を掛けているのだが、それをペラリと持ち上げて手招きする。

え……？ 隣で寝るの？

固まっている私を見て、グルドさんはちょっと申し訳無さそうに言った。

「ごめんね、この布一組しか無いんだわ。嫌なら俺は地べたで寝るよ」

私はハッと息を吸い込む。

「い、いいえ！ 嫌じゃないです。グルドさんを地べたで寝かせるなんてできません」

「そう言ってくれると思った」

あはは、とグルドさんが笑う。

「ま、安心してよ。チノちゃんみたいなウブな子に手を出すほど、おじさん飢えてないから」

その言葉に安心すると同時に、ちょっとだけムツとしてしまった。本当にグルドさんは、私のこと女として見てないんだなって。

かといって、もちろん襲ってほしい訳ではないけど。

我ながら面倒くさいやつ……。

私はいそいそとグルドさんの隣に寝転んだ。

「もうちょっとこっち来ないと、そっちの腕出てますよ、お嬢さん」
しかしぐいっとグルドさんに引き寄せられ、一気に恥ずかしさと

緊張がこみ上げてきた。

私は仰向けに寝転がっているけど、グルドさんはこっちに体を向けて片ひじをつき、頭を支えている。

ち、ち、ち……近い。すごく近い。グルドさんの顔がすぐそこに

……

鼻高いなあ。歳の割に若々しい顔つきだし、無駄な肉がない。私みたく、ほっぺがプニプニしていないのだ。

「明日はどこかで服を調達しないとなあ」

緊張でガチガチな私に対して、のんびりとそんな事を言っているグルドさんに、また少し苛立ってしまう。
なんだろう、この気持ちは。

私のこと全然意識してないっていうなら、こうしてやる！
えーい！ と気合いを入れて寝返りを打つと、私はグルドさんの胸に顔を寄せて密着した。

「何？ どうしたの？」

驚いたのだろうか、グルドさんの肩がビクリと揺れたのを感じて、私はほほ笑んだ。

「寒いので」

彼が少しでも動揺してくれたことに満足しつつ答えた。だけど本当にこうしていると温かい……

最初の緊張はどこへやら。疲れていたこともあって、私はあっさりグルドさんの腕の中で眠りに落ちた。

「ちょっと……おじさん若い奴よりは我慢強いけど、まだ枯れてはいないんだけど……。なにこの新手の拷問」

そんなこんなで3日が過ぎ、私たちはクロツカを上手く抜け、隣国のシロルに入ることができた。グルドさんの逃げ方がよかったのか、追っ手に見つかるともなかった。私一人ではこうはいかなかっただろうから、ほんと彼に感謝だ。

シロルでの目的地は城だった。グルドさんが密偵として得た情報を味方に伝えなければならぬし、クロツカが召喚術で勝利の女神を喚び出そうとしていたことも含めて、私のこともシロルの王様に話すという。

不安げな顔をする私に、シロルの城ではクロツカのような扱いを受けることはないと言ってくれた。

クロツカに戻るのには嫌だし、これからシロルの国で生きていくことになっても不満はない。だけど心細いのは、知らない国で一人で生きていかなければならないことだ。

グルドさんは何かと世話を焼いてくれそうだけど、ずっと一緒にいてくれる訳ではないんだし。

私はなんとなく、城へ着くのが憂鬱になっていた。城へ着いたら、2人きりの逃亡劇は終わってしまう。

グルドさんはシロル兵として戦争に集中しなきゃならなくなるし、女神でもなんでもない私は一般人として生きていくことになり、き

つとグルドさんと会うことも難しくなっていくんじゃないかな。
そう考えると寂しくてたまらなくなるのだ。

「ちょっと町を見回ってみるかい？」

シロルに入ってから2日。サーデュという大きな町に着いたところで、グルドさんが私を誘った。

今まではひたすら逃げるだけだったけど、シロルに来てからはゆつくりと旅を進めていた。クロツカの追っ手はここまで来られないから、焦る必要はなくなったのだ。いつ見つかるかとコソコソする必要もない。

町の宿に荷物と馬を預けて、私たちはサーデュの町に繰り出した。宿から近い通りでは様々な店が屋台を出しており、活気があり賑やかだった。ちょうど地元のお祭りの日だったらしく、人が多くて前に進むのもひと苦労。

屋台では、美味しそうな食べ物やあざやかな織物、手芸品、美しい宝飾品なんかも売っている。違う世界から来た私にとって、どれも見慣れない珍しいものだ。

「あれ何ですか？」

黄色い芋のようなものを蒸して売っている屋台を指差した。私がクロツカで食べていたお芋はもっと白かったんだけどな。

「ああ、あれはアルタっつー芋だよ。蜂蜜をかけて食うんだ」

「お芋に蜂蜜を？」

「甘くて美味しいよ。買ってくるから食ってみ」

そんなつもりで言ったんじゃないのだが、グルドさんはさつさと屋台の方へ行き、両手に一つずつ蜂蜜のかかったお芋を持って帰ってきた。皮がついたままの熱々のそれを受け取って、お礼を言う。

「すみません、お金は稼げるようになったら返します。いつになるかわかりませんが、必ず」

「律儀だねえ。だけどこれくらいおごらせて。年下の女の子に金せびるほど貧乏じゃないよ、俺は」

「けど、宿代とか洋服代とかも出してもらってるし……」

食い下がったけど、グルドさんは「こういう場合、男が払うのが普通だから」とか言って聞いてくれなかった。

「すみません、ありがとうございます」ともう一度お礼を言い、木でできたヘラのようなスプーンでお芋をすくって口へ運ぶ。

お芋はしつとりとなめらかで甘く、デザート感覚で蜂蜜にもよく合っていた。

「美味しい……！」

感激して目を丸くすると、グルドさんは穏やかに笑った。

「だろ？」

その後も動物の形をした飴だったり、バナナの揚げたのだったりを買ってもらいながら、私がねだったんじゃない、グルドさんが買って与えてくるのだ、町をうろつくと歩き回った。

しかしそろそろ宿に戻ろうかと思った時、ふと隣にグルドさんがいないことに気づいたのだ。

人が多いから、はぐれないように注意してたつもりなんだけど……

「グルドさん？」

とりあえず呼びかけてみるが、周りの人たちの喧噪にかき消されてしまう。人の波をぬって、くせ毛の黒髪を探してみるが、どこにも見当たらない。いつ、どこではぐれたのかも分からなかった。

「グルドさーん！」

ちよつとだけ焦る。

どうやら私、迷子になったようだ。

「一旦、宿に戻るのかな」

しばらくグルドさんを探したけど、結局その姿を見つけることはできなかった。人が多くて無理だ。

きつとそのうちグルドさんも戻ってくるだろうし、と、私は宿のある方向に歩き出した。

が。

宿の部屋へ帰って1時間経っても2時間経っても、待ち人は来たらず。グルドさんは一向に戻ってくる気配がない。

まだ私のこと探してるのかな？ もう一度通りに出た方がいい？ でも入れ違いになるかもしれないし……

部屋の中で待機しながらさらに1時間以上が経ち、外はすっかり暗くなってしまった。窓から通りの方を見ても、もう店や屋台は閉められていて、人通りもなくなっている。

さすがにおかしい。グルドさんは何をやっているんだろう。

部屋のろうそくもつけず、薄闇の中でじっと彼の帰りを待っている内に、私の頭にある考えが浮かんでしまった。

まさか、置いていかれた？

まさか置いていかれた？

私をつれて逃げるのが、もう面倒になったとか？ 荷物はこの部屋に置きっぱなしだが、野宿の時に使った布や服の替えが入っているくらいで、貴重品はグルドさんが持ったままだし……

グルドさんはそんな事する人じゃないとは分かっているけれど、不安で心細くて、考えが暗い方へ行ってしまう。

だって3時間も戻ってこないなんておかしいよ。外の人通りはほとんどなくなっていて、グルドさんがまだ私を探しているとは思えない。

外に行つて、馬をつないでいる小屋を調べた方がいいだろうか。でも、そこに馬がいなかったら、私が置いていかれたのは確実になってしまう。

……どうしよう。見に行きたくない。けど、確認はしておかないと。

もし本当に置いていかれたのなら、これから自分だけでどう生きていくか考えなければならぬ。この国のことをほとんど知らない私だけど、雇ってくれるところはあるだろうか？ 一人でちゃんと生活していけるだろうか？

もう、グルドさんには会えないのかな……

うじうじと考えているうちに、涙が込み上げてきた。親に置いていかれた子供じゃあるまいし、これくらいで泣くなんて思うけど、

グルドさんの姿を思い浮かべるとどうしようもなく悲しくなる。
とにかく馬小屋を確認しに行こう。そう決意して立ち上がった時
だった。

「ああ、よかった。ちゃんと戻ってたね、チノちゃん」

部屋の扉が開いて、ホツとした表情のグルドさんが現れたのだ。

「遅くなつて悪かったね　って、泣いてる？」

置いていかれた訳じゃなかった。置いていかれた訳じゃなかった
んだ。

そう理解して安心し、一気に気が緩んだのか、私の目からはポロ
ポロと涙が溢れ出していた。

「よ、よかった……っ、置いていかれたかと、思っ……」

ヒックとしゃくり上げながら言うと、グルドさんはおろおろと狼
狽し始めた。

「い、いやいや……君を置いていく訳ないですよ。いいコだか
らちよつと落ち着いて。こっちおいで」

うー、と泣き続ける私の腕をグルドさんが引く張る。彼は寝台に
腰掛けると、私を横向きにして膝の上に乗せた。恥ずかしくて涙が
ちよつと引込む。

「ほら、泣かないで」

少し日に焼けた無骨な指が、涙に濡れた私の頬をぬぐう。

「今まで何してたんですか？」

じろりとグルドさんをねめつけた。安心したら、今度は「不安にさせやがって、このこのっ！」という怒りが湧いてきたのだ。

グルドさんは困ったように笑って言う。

「チノちゃんと逸れたことに気づいて、しばらく人ごみの中を探しまわってたんだけどさ、ある店のおばちゃんが『さつき若い女の子が男らに無理矢理連れられていったよ』なんて言うのよ。だから俺はてつきりそれがチノちゃんだと思ってさ。路地裏から何から血眼になって探しまわってたわけ」

私を膝に抱えているグルドさんから、薄く汗の匂いがしている理由が分かった。私がさらわれたと思って探してくれてたんだ。

「で、そいつら見つけて女の子はチノちゃんじゃないと気づいたんだけど、放って帰ることもできないしってことで、チンピラどもをシメて、彼女を家まで送ってたりしたらこんな時間に……。一人にして悪かった、不安だったよねえ」

よしよしと髪を撫でられて、私はちよつと赤くなった。

何だか恥ずかしい。グルドさんは必死で私のことを探してくれてたのに、置いていかれたんじゃないかと疑って、心配してたなんて。

「泣き止んだ？」

「はい、すいません」

「いいよ、何で謝るのよ」

グルドさんはそう言って笑った後で、「ごそそとポケットを探りはじめる。」

「実はこれに気を取られて、チノちゃんのこと見失っちゃったんだよね」

取り出したのは、華奢な金色の鎖にいくつかの小さな薄桃色の石がついたブレスレットだった。

可愛いデザインのををじっと眺めて、何だか意外だなとは思った。

「グルドさんってそういうのが好きなんですね。ちょっと可愛すぎる気もしますが……うーん、似合うと思いますよ、たぶん」
「いや、似合うと思ってないでしょ。つか、俺がつけるんじゃないから」

呆れたようにグルドさんが言う。

「これは君のために買ってきたの」

グルドさんの黒曜石みたいな瞳が、真っ直ぐに私を射抜く。

「え……私に？」

目を見開き、彼の手のひらに乗った可憐なブレスレットを見つめた。男の人からプレゼントを貰うなんて初めてだ。

すごく嬉しいけど、これは……

これを貰ったら……

私はぐつと唇を結んだ。

「せっかくですけど、私は受け取れません」

拒否されるとは思っていなかったのか、グルドさんは少し驚いたような顔をした後、苦く笑って言った。

「アクセサリーは重かったかな。けど、君に似合うだろうなと思って買っただけだから、他意はないよ。遠慮せず受け取っ」

「他意がないなら、なおさら受け取れないです！」

早口で小さく叫んだ後、うわーんと声をあげて再び私は泣き出した。

グルドさんと出会ってから、何だか情緒不安定だ。召喚されてこの世界へ来てしまった時だって、こんなに大泣きはしなかったのに。

「そんなの貰ったら、私グルドさんのこと忘れられなくなるじゃないですか！ プレスレット見るたび、グルドさんを思い出すんです！ もうすぐ離れなくちゃいけないのに……」

うう、と泣いてグルドさんの肩に顔をうずめる。

しばらくの沈黙の後、グルドさんは困惑したように口を開いた。

「もうすぐ離れなくちゃいけないって？」

「だってそうでしょう？ 二人きりの旅はシロルのお城に着いたら、終わっちゃいます」

「まあ、それはそうだねえ。……けど、『その後も二人一緒にいる』っていう選択肢もあるんじゃないかな」

静かにつむがれたグルドさんの言葉を聞き、私は泣くのを止めて顔を上げた。口をポカンと開けて、きつと間抜けな顔をしているだろうな。

グルドさんは頬を掻いて 照れてる時にするしぐさだ 私から微妙に視線を外しながら言う。

「というか、それは俺の勝手な望みだと思ってた。君はまだ若いからこんなおじさんには興味が無いだろうし、城に着いた後は同じ位の歳のいい男を探すだろうって。だけど今のチノちゃんの言い方を聞いてるとまるで……」

「グルドさんの事が好きみたいです……です」

彼の言葉を、途中で私が引き継いだ。

今やっと、自分の気持ちをはっきり自覚したのだ。

「ていうか……うん、好きです、すごく」

自分の気持ちに気づいたら、何だかすっきりと爽快な気分になった。今まで感じていた不安感に説明がついたからだろうか。

グルドさんの言動に一喜一憂していたのも、彼の事が好きだったからなんだな。

「チノちゃん、嬉しいけど……ちょっと冷静に考えてごらん」

動揺しつつ、グルドさんが言う。

「シロルの城に着いたら、俺より若くて外見のいい男はたくさんいるよ。今まで、君はこの世界に親しい人間がいなかった。だから一番近くにいた異性である俺を好きになったと勘違いしてるんじゃないのかな」

「勘違いなんかじゃありません」

キツとグルドさんを睨み、震える声で言った。私の恋心を受け入れろとは言わないけれど、否定はしないでほしい。彼を好きだという気持ちは、確かに私の心の中にあるのに。

じんわりと切なさがこみ上げる。

「グルドさんは私のことを助けてくれたし、旅をしてる間もずっと優しくしてくれました。『一番近くにいた異性だから』という理由で、私はグルドさんのことを好きになったわけじゃないです。一番近くにいたのがグルドさんだったから、私はあなたのことを好きになったんです。なのにそれを……勘違いだなんて言わないで……っ」

顔をくしゃりと歪めて涙をこぼすと、グルドさんは慌てたように私の頭を撫で、「ごめん」を何度も繰り返した。

「ごめん、年を取ると慎重になつてね。相手の気持ちをちゃんと確認せずにはいられないのよ。情けないけど、『やっぱり他の人がいいかも』なんてチノちゃんに捨てられるのが怖くてね」

そこまで言うと、グルドさんは声を落としてささやくように続けた。

「俺も君の事が好きだよ。素直で可愛くて、たまに気の強いところだね」

グルドさんの大きな手が、私の頬に添えられる。そっと顔が近づいてきて、じれったいほどゆっくりと唇が重なった。

初キス。唇をくつつけるだけの軽いキスだと思ってたから、私の中にグルドさんの熱い舌が入ってきた時にはちよっとひるんだ。全然嫌じゃないんだけど、気持ちよくて背筋がぞわぞわして、何だか変になりそう。

思わず体を離そうとしたけれど、頭と腰をがつつり固定されて動けない。頭がぼうつとして、のぼせてしまう。

「……っは」

やっと唇が離れたかと思ったら、息継ぎもそこにまた塞がれる。

「んッ……」

なんせ私はキス初心者なので、されるがまま、グルドさんを受け入れる事しかできなかった。

キスって結構、体力勝負なものなのね。
そろそろギブしてもいいでしょうか。

「おはよう」

朝起きたら、グルドさんの精悍な顔が目の前にあった。

そうだ、この部屋には寝台が2つあるけど、昨日は1つの寝台で一緒に寝ることにしたんだった。

「……おはようございます」

布団を口元までかぶったまま、小さく挨拶を返した。キスした事を思い出してしまって、すごく恥ずかしい。

グルドさんが「ゆっくりね」と言ったので、結局昨日はキス以上に発展する事はなかった。ただとそれだけでも、こうやって改めて顔を合わせると照れてしまうのだ。

軽く身じろぎすれば、私の右手首で細い鎖がしゃらりと鳴った。

昨日貰った、あのブレスレットだ。

私この人と両想いなんだなあ、とグルドさんの顔を見ながら思っ。恥ずかしくて嬉しくて胸が高鳴るような感じ。

「寝癖ついてる」

グルドさんは笑って私の髪をすいた後、そこにチュッと口づけを落とした。

なんという素敵なまどろみの時間。

彼がいてくれるのなら、この世界でも強く楽しく生きていけそう
な気がした。

ああ、でも……

まだ本格化はしていないが、この国は今戦争中だ。
兵士であるグルドさんが、クロツカとの戦いで命を落とす可能性
も十分にある。

「そろそろ起きようか」

「はい」

私は心の中で祈った。

勝利の女神アプロディーテ様、どうかこの国に味方して下さい。
私の大切な人が、戦争で傷つきませんようにと。

それからお城に着くまでには、さらに4日かかった。そろそろ疲れの溜まってきていた私を気遣って、グルドさんがゆっくり馬を走らせたからだ。

この国の事を何も知らない私のために、町を案内してその生活の

様子を見せてくれたりもした。

お互いの気持ちを認識してから、グルドさんの態度はちょっと変わった。今までよりさらに優しくなったし、甘くなった。

寝台まで朝食を持ってきてくれたり、起きる時にブーツを履かせてくれて紐を結んでくれたりと、どこの若奥様だと思っほど、かいがいしく面倒をみてくれるのだ。

「いいです、自分でやりますから」という私の言葉は、一切聞こえていないらしい。

あとは身体的接触が明らかに増えた。

町を歩いている時にさりげなく腰を支えられていたりして、半径1メートル以内には常にグルドさんがいるような状態。

二人きりになった時など言わずもがな。キスは雨のように降ってくるし、とにかく密着、密着。

グルドさんって結構愛情表現の激しい人だったらしい。

それでも大人の余裕はあるらしく、本格的に手を出してはこない。そういう経験のない私に合わせてくれてるみたい。

私は初めてできた恋人にドキドキと緊張しながら、しかし楽しくこの4日間を過ごした。

「見えてきたな」

「わ、大きいですね」

そして、やっとたどり着いたシロルの城。

その外観はクロツカの城とは違って派手さが無く、きらびやかでもなかった。しかし重厚で貫禄があり、隙がない。宮殿というより要塞といった感じの城だ。

「何だか緊張します」

「だいじょーぶ。俺がいるからね」

グルドさんはそう言ってほほ笑むと、城の方角へと馬の鼻先を向けた。

門を通って城の敷地内に入ると、グルドさんはその辺を歩いていた若い兵士に馬の世話を頼んだ。

「あれ？ グルドさん？」

城の回廊を歩いていると、爽やかな雰囲気 of 兵士が声をかけてきた。どうやらグルドさんの知り合いのようだ。

「おー、ラックスか」

「お久しぶりです。前回戻られたのが1年前でしたから、それ以来ですね。……おや、そちらの女性は？ 可愛い方ですね」

ラックスという名前の爽やか兵士さんは、グルドさんと挨拶を交わした後、色を含んだ眼差しを私に向けた。

グルドさんは言う。

「彼女の事は後で紹介する。ついでだからお前も一緒に陛下のところまで来てくれるか？ 何度も説明すんのは面倒だから、アスクたちもまとめて来てほしいんだが」

「アスク閣下たちは今、城にはおられませんよ」

「ならいいや。とりあえずお前だけ来い」

「分かりました」

にこりとこちらに笑いかけてから、ラックスさんは私の隣に並んで歩き出した。反対側にいるグルドさんが、何気にぐいと私の腰を寄せる。

「もしかしてそういう事ですか？」

ラックスさんが残念そうな声を出す。この人、穏やかな顔して手が早そうな人だ。私の中の淑女が、彼を警戒するようにと告げている。悪い人ではないんだろうけど。

「そーゆー事。お前の出る幕なし！」

グルドさんが勝ち誇ったような笑みを浮かべた。

その時の私は「そういう顔もかっこいいなあ」なんて思ってしまった。ってんだから、確かに彼の出る幕はないかもしれない。

「疲れてないか？ 陛下との面会は休憩を取った後の方がよかったかな」

「いいえ、私は大丈夫です」

気遣わしげに聞いてくれたグルドさんに、ほほ笑みを返す。シロルに入ってから野宿をせず宿をとっていたから、特に大きな疲れはない。

「随分お優しいですね」

からかうようなラックスさんの軽口を、グルドさんはまるっと無視した。なんだかんだで仲は良いんだろう。

「よく帰ったなグルド。しかし予定より1ヶ月ほど早いんじゃないか？」

優美な調度品に彩られた部屋の中で、王様は私たちを待ち構えていた。

「色々と事情がありまして」

グルドさんがのんびりと答える。彼に続いて私、ラックスさんも室内へ入った。

この国の王様は、クロツカの王のように若くはない。50歳くらいで体が大きく、豪放磊落（ごうほうらいらく）といった雰囲気の人だ。

王様は長椅子から立ち上がり、茶目っ気のある視線を私に向けた。

「それはお前の連れて来たそのお嬢さんと関係があるのか？」

グルドさんはうなづく。

「ええ、実は……」

クロツカが召喚術で勝利の女神を喚び出そうとしたことや、私がその召喚に巻き込まれてこちらの世界へ来たことを、グルドさんは簡潔に話し始めた。

殺されそうになった私を彼が助け、ここまで逃げてきたのだと説明すると、王様は哀れむように私を見て言った。

「災難だったな。違う世界から、よりによってあのような国に召喚されるとは」

「はい……」

他に返す言葉もなかったので、私は素直にうなづいておいた。災難だったのは確かだ。

「長旅で疲れただろう。まあ座れ」

王様に勧められるまま、目の前の長椅子に座る。と、完ぺきなタ
イミングで侍女さんが部屋に入ってきて、私にお茶を入れてくれた。
王様もグルドさんもラックスさんも、私以外の全員が立ったまま
なので、一人座ってお茶を飲むのは気まずいんですけど。

そわそわと落ち着かない私の様子を見て、王様が笑う。

「気にせず飲め。我々は甘い茶よりも酒の方が好きなんだ」

だから侍女さんは私にしかお茶を入れていかなかったのか。

「では、頂きます」

私がかップに口をつけるのを見届けてから、王様がグルドさんを
近くに呼んだ。

「で、クロツカの様子はどうだ？」

戦争や国勢に関する真面目な話が始まると、グルドさんも表情を
引き締めた。2人で向かい合って、真剣な話し合いを続けている。

私こんな所にいていいんだろうか、と思っただが、追い出されない
という事はいいだろう。ラックスさんは王様たちの方へは行かず
私の側に残り、何気ない世間話をして気を紛らわせてくれた。

しかし同じ部屋にいるのだから、グルドさんたちの話の内容も聞
こえてくる。

「兵の数からして負けるわけがない、と高をくくってましたから、
うちに西の町エステルを落とされた事でクロツカは焦ったようです」

クロツカの内状を、グルドさんが静かに説明している。

「数ヶ月前から、まだ10歳かそこらの子供たちを集め、少年兵として鍛え始めてます。戦闘に関して素人の農民や女も採用して、とにかく兵士の数を増やしてんですよ」

「クロツカめ……」

王様が苦々しい顔をして舌打ちをする。

ラックスさんとお喋りしながらそっちの話を聞いていた私も、思わず顔をしかめた。子供を戦わせようとするなんて……

やっぱりクロツカの王様や大臣たちは最低だ。あんな人たちが国を操っているから

「……!？」

その時突然、私の頭の中に声が響いた。

ラックスさんにもグルドさんにも変わった様子はない。私以外の人には聞こえていない？

私が動揺している間にも、声は頭の中で反響していた。少し低くて張りがあり、意志の強さと深い優しさを感じる女性の声。

この声はまさか、まさか……

「どうしました？」

息を詰め、ぴたりと固まったまま宙を見つめている私に、ラックスさんが気づいた。

「大丈夫ですか？」

目の前でひらひらと手を振ってくる。

しかし今はラックスさんに構っている暇はないのだ。頭に流れ込んでくる声を聞き逃すまいと、私はまばたきも忘れて集中していた。

「チノちゃん？」

こちらの様子に気づいたグルドさんが、王様との話を中断して近づいてくる。急に応答しなくなった私に、皆が注目しているのが分かった。

だけどこの声を無視する事はできない。

「チノちゃん、どうした？ …… チノ！」

グルドさんが焦った声を出し、私の肩を軽く揺する。

ちよっと待って。私、今……

固まっていたのは、時間にして1分ほどだっただろうか。

私はふうと息を吐き出し、現実に戻ってきたかのようにパチパチとまばたきを繰り返した。

「チノ！ どうしたんだ？ 大丈夫か？」

心配したグルドさんが、早口で私に問いかける。

「大丈夫です。すみません」

「一体どうした」

王様は腕を組んで、訝しげにこちらを覗き込んでいた。

私は部屋の中にいる人たちを見回し　グルドさんはもちろん、ラックスさんも王様も信用できる人だと思う。頭の中の”声”も、そう言っていたし　、口を開いた。

「えっと、何から話していいのか……」

眉を下げ、一番近くにいる愛しい人を見つめた。

「グルドさんにもまだ言っていなかったんですが、実は私……
”天使”なんです」

「……は？」

部屋の中の全員が、『気は確かか？』みたいな顔をしてこっちを見た。

「僕たちをからかっている訳じゃありませんよね？」

困惑した表情でラックスさんが問いかけてきた。

私はなるべく真剣な声を出して答える。

「ええ、大真面目に言ってます。私は天使です」
「……………」

みんなは無言で顔を見合わせている。

突然天使だなんてカミングアウトされたら、そりゃ驚くだろうけど。

しばらく沈黙が流れた後で、グルドさんが口を開いた。

「じゃあこの世界に召喚される前、チノちゃんが住んでた世界ってのは……………」

「天界です」

即答する。

「天界というのは確かに存在していて、天使や神もそこで穏やかに暮らしているんです。いきなりこんなこと言われても信じられないでしょうけど……………」

私が肩をすくめると、隣に腰掛けたグルドさんは一瞬考えた後、力強く言った。

「いや……………信じるよ。チノちゃんはそんな嘘つく子じゃないし。そ

れにそう言われれば、容姿だって天使っぽいもんねえ。金髪だし、色白だし」

長く伸びた私の淡い金髪を、グルドさんが優しく撫でる。彼は黒髪だし、ラックスさんや王様は茶色。シロルの町を歩いていても地味めな色の人が多かったから、この世界には金髪は多くないのかもしれない。クロツカの王様くらいしか見たことないもんな。

「本当に信じてくれるんですか？」

私が聞くと、グルドさんは自信たっぷりになつた。

「もちろん」

「ありがとうございますっ」

彼が私の言葉を信じてくれたことが嬉しかった。天使としての私の存在を、天界という私の故郷を否定しないでくれた。

しかし疑っていないのはグルドさんだけで、他の人たちは私が天使だという事実を完全には信じきっていないようだ。王様は厳しい顔つきで、ラックスさんは戸惑った表情のまま、私を観察するようにつめている。

私にとっては、グルドさんが信じてくれただけで十分だけど。

「では、さっきのは何だったんです？ 宙を見つめたまま急に動かなくなつて」

おずおずとラックスさんが口を開いた。

「えっと……普通の人間の人にとってはさらに信じがたい話をしますけど……なんなら話半分で聞いて下さい」

と、前置きをしてから私は説明を始めた。

「クロツカが召喚しようとした勝利の女神アプロディーテ様ですが、実は彼女もちゃんと存在しています。アプロディーテ様は私を生み出した母であり、私が天界でお仕えしていた上司でもあるんです」
「勝利の女神が実在する？」

王様が片眉をあげた。私の不可思議な話を聞いて、眉間にしわがよつてゐる。

この世界にも神を深く信仰している人はいるようだけど、でも、大多数の人はその存在を本気では信じていないのだろう。

特にこの王様は、困った事が起きても神に頼らず、自力でなんとかしてみせるっていうタイプっぽいし。別にそれは悪い事じゃないけれど。

「で、さっき私が固まっていたのは、アプロディーテ様のお声を聞いていたからでして……。私が天界から消えてから、アプロディーテ様はずっとその行方を探って下さっていたらしいのです。けどまさか人間界に召喚されているとは思わず、見つけるのに時間がかかったと。『やっと見つけた』と声をかけて下さいました」

王様とラックスさんの訝しげな視線が気になって、だんだんと私の声は小さくなっていった。グルドさんは勇気づけるように私の背中を撫でてくれている。

しかし全員真面目で険しい顔をしていた中で、ふと王様が表情を崩した。

「うーむ。私はあまり神の存在を信じていなかったんだがな。これからは食事前の祈りも真剣にやるとしよう」

冗談めかした王様の言葉に、部屋の空気がすっと軽くなった。
ラックスさんも笑う。

「そうですね、僕も今晚からちゃんとやります」

グルドさんだけは真面目な表情をしたまま、ぽつりと言った。

「チノちゃんがアプロディーテの下で働く天使だったってことは、クロツカの召喚術は案外いい線いってたってことだな。本当に勝利の女神を喚び出せてたかもしれないね」
「奴らはまた召喚術を使うと思うか？」

王様の瞳が一瞬で鋭くなった。

グルドさんは腕を組んでうなる。

「いやあ、どうでしょうねえ。チノちゃんの召喚を奴らは失敗だと思ってますし、あの王ももう召喚術には興味をなくしていたようですが……。この先戦況が危うくなれば、また召喚に頼る可能性もあります」

「たとえクロツカが召喚術を使っても」

「

グルドさんが喋り終わると同時に、私は口を開いた。

「そしてそれが成功したとしても、アプロディーテ様は召喚に応じないと思います。だってアプロディーテ様、今すっごく怒ってますもん」

そう言って上を指差した。私の言葉に同意するように、今もアプロディーテ様の声は頭の中に響いているのだ。

「私を地上に引きずり降ろしたあげく、殺そうとした事、怒って下さっているんです。だからこの戦争も、クロツカの味方には絶対につかないとおっしゃってます。『わたしの可愛い天使攫いやがってあいつらほんと調子乗り過ぎ。マジ一回シメる。徹底的に潰す』って……」

説明しながら、私は冷や汗を垂らした。アプロディーテ様はちょっぴりお口が悪いのだ。

グルドさんたちも微妙に顔を引きつらせている。王様は笑ってるけど。

私はコホンと咳払いをした後、気を取り直して話し出した。

「アプロディーテ様はこの戦争で、必ずシロルに勝利をもたらして下さるでしょう。グルドさんは五分だとおっしゃっていた勝率も、勝利の女神がつくことによつて格段に跳ね上がると思います。何もかもがシロルの都合のいいように進み、クロツカはほぼ自滅に近いカタチで負ける事になる。クロツカが子供や女性を使つていくら兵の数を増やしても、卑怯な戦法を使つても関係ない。天はシロルに味方しているんですから」

アプロディーテ様の力は強大だ。それをご自分でも分かっているから、普段は力を抑えておられる。

だけど今回は「マジ本気出す」とキレてらっしゃるから、クロツカという国はあっけなく終わる事になるだろう。神様を怒らせると怖いのだ。

私は続けた。

「戦争はシロルが一方的に勝つ事になるので、双方の兵や民間人の犠牲者も驚くほど少なくなるはずです。ただ、アプロディーテ様の

怒りを持ったクロツカの権力者たちは、悲惨な最期を迎える事になるでしょうけど」

上の人間が愚かなだけで、クロツカの民に罪はない。アプロディ―テ様はそう思っておられるみたい。私に優しく接してくれた侍女のマリンさんのことも、「きっと無事に戦火から逃がしてやる」と約束して下さいました。

そしてグルドさんの事も「守ってやる」と。

よかった……

私は心の底から安堵した。

ホッとして隣にいるグルドさんにほほ笑みかけると、彼は「？」と首をかしげながらも笑みを返してくれた。

「どした？ 何で笑ってるの？」

「内緒です」

「気になるなあ」

ふふふ、と笑い合う私たち。

王様はそれをしばらく眺めた後で、話を元に戻した。

「だが勝利の女神が味方してくれるからといって、気を抜く事はありません。兵士たちが緊張感を無くすといかんから、ラックスもグルドもこの話は口外するなよ」

その言葉に、二人とも「了解です」と返事をする。

確かに、勝利の女神が味方につきシロルが勝つのは決定的だと知ったら、気を抜いてしまう人もいるかもしれない。現にアプロディ―テ様の力を信じている私なんて、戦争が終わっていないうちから、もうすっかり安心してしまっているもんな。

王様は、今度は私に向かって言う。

「お嬢さんが嘘をついているとも思えんが、完全に信賴する事もで
きんだ。悪いが、君もあまり天使だ女神だという話は周りに言わ
ないでくれ。それは君の身を守るためでもある。熱心な信仰者に目
をつけられたらやっかいだぞ」

私は「はい」と真面目にうなづき、それを了承した。

もとより、私が天使だということや、アプロディーテ様に仕えて
いるというような事をベラベラと言いふらすつもりはなかったし。

「それで君はこれからどうするつもりだ？ シロルに居たいという
のなら受け入れるが」

王様はこつちを真っ直ぐに見て言った。

「君の故郷が天界だというのなら、空の上に帰るつもりでいるのか
？」

その質問には、私よりもグルドさんが反応した。ぴくりと肩を揺
らして息を詰める。

私が元の世界に帰るか否か。それは彼も気になっていながら、聞
けずにいた質問だったのだろう。

ゆるゆると首を振って、私は答えた。隣でグルドさんが緊張して
いるのが分かる。

「悲しいけれど、私は二度と天界へ帰ることはできません。なぜな
らもう……私には翼がないから。背中に生えていたはずの翼が、ク
ロツカに召喚された瞬間から消えてしまっているんです」

天界にいた時、私の背中には確かに翼があった。一對の小さな白い翼は、天使の象徴ともいうべきもの。それが無ければ、空を飛んで天に帰ることもできない。

「きっと私はもう、天使ではないんだと思います。地上に降りてその汚れに触れた瞬間から、私はただの人間になったのだと……。だからこそ、アプロディーテ様はあれほどクロツカにお怒りになったのだとも言えますし」

私の話に反応して、頭の中に声が響いた。アプロディーテ様の力を持つてしても、私を天界に戻す事はできないらしい。だけど私のことは、「これからもずっと上から見守り続けるから」と言っただけだ。

嬉しくて、心がじんわりと温かくなった。故郷に帰れなくても、アプロディーテ様とこうやって繋がっていられるなら寂しくない。私はこぼれそうになった涙をのみこみ、ふわりと笑って言った。

「それに、たとえ天界へ帰れるという選択肢が残っていたとしても、今の私はそれを選ばないかもしれません。だってグルドさんと離れるのは辛いですし……」

今までじつと黙っていたグルドさんを見上げると、彼は軽く目を見開いた後で、何故かぐつと表情を歪めた。

歡喜に満ちながらも泣きそうな顔をして、私を力強く抱きしめる。

「わっ！」

「ごめん」

いきなりの包容に驚く私に、グルドさんは言う。

「ごめん、俺……チノちゃんが自分の世界に戻れないって知って……すごい喜んでる。チノちゃんは悲しい想いをしてるってのに……ごめん、ごめんな」

私を抱く腕の力が、さらに強くなった。

こんな風に素直で優しいグルドさんだからこそ、私は彼を好きになつたのだ。

「いいんです、気にしないで下さい。これからグルドさんがこの世界で、私のことを幸せにしてくれるだけですから」

ニツと笑って冗談っぽく言うと、グルドさんも顔を上げて嬉しそうに破顔する。

「約束するよ。必ずチノちゃんを幸せにする」

私たちは自然に顔を寄せ、喜びに満ちたキスを交わしていた。腕につけていたブレスレットがきらりと輝く。

頭の中で、アプロディーテ様も祝福してくれている。その男なら大丈夫だ、と。

地上には天界にはない苦しみや悲しみが溢れているけど、二人ならきつと乗り越えられるはず。

「いちやつくなら二人きりの時にしてくださいよ」

「ああ、お前たちはそういう関係だったのか。随分若い娘を捕まえたな、グルド」

キスを続ける私たちの耳には、呆れるラックスさんの声と、感心しているような王様の声は聞こえてこなかった。

10（後書き）

本編はこれで完結です。

あと1話、後日談的なものを載せて終わりにしたいと思います。
ここまで読んで頂き、ありがとうございました！

後日談（前書き）

新婚さんがイチチャついでるだけの話。

後日談

最近シロルでは『バーツ』というボードゲームが流行っている。

兵士に見立てた馬、象、犬なんかのコマを動かして、相手の”王”

ライオンのコマを取ったら勝ち、というゲームだ。

「王様、打ち取ったりー！」

高らかに声をあげると、私は自分の馬のコマで対戦相手のライオンのコマを倒した。また、私の勝ちだ。

「ぐむむ……」

向かい側に座り、苦い顔であごに手を当てているのは、このシロルの国の王様。

このところ、私はよくこの王様に城へ呼び出されていた。彼の『バーツ』の相手をするためだ。

「もう1回だ！」

負けず嫌いな王様が声を張り上げる。

「えー、もう12回目ですよ」

さすがにうんざりしてきて、失礼とは思いつつも思いきり嫌な顔をして言った。王様は普段は年相応に落ち着いているのだが、こういう時には頑固で子供っぽくなる。そこが親しみやすいところでもあるのだけれど。

「勝ち逃げは許さん」

「そんなこと言っただって……」

ソファアの背にもたれて、新しくコマを並べ始めた王様を見つめていると、ノックと共に部屋の扉が開いた。入ってきたのはグルドさんだ。

助かった、と私は安堵する。これで『バーツ』の無限ループからは抜け出せそう。

「まだやってんですか、陛下。何度やったってチノちゃんには勝てっこないって分かってんでしょ？」

グルドさんが呆れた様子で言う。

1ヶ月ほど前に終わったクロツカとの戦争は、優秀なシロルの兵士とアプロディーテ様のご加護のおかげで大勝したが、グルドさんたちはまだまだ後始末に追われていた。

王様だって、私とのほんとゲームしている場合じゃないと思うのだが……。

「分からんぞ。挑戦し続ければいつかは……」

「無理ですって」

王様の言葉をグルドさんが切った。

「うちの可愛いチノちゃんのバックには、勝利の女神様がついてんですよ。こんなお遊びのゲームでも、勝負事でチノちゃんが負ける事はないんですから」

グルドさんの言う通り、どうやら私はアプロディーテ様のお力に

よって、負け知らずな存在になってしまったらしい。

実はこの『バーツ』というゲームもこの前やっとルールを覚えただけなのだが、勝利の女神の加護を受けた私は、誰と対戦したって負ける事がないのだ。

王様以外の人たち　　グルドさんやラックスさんとも対戦したけど、結果は同じ。

この力を利用すれば、例えば賭け事なんかでがっぽりとお金を稼ぐことも難しくないのではないかと、天使らしからぬ事を考えてみたりして。

もちろん実際にはやらない……うん……やらないよ？

「もう昼ですよ。そろそろうちの奥さんを解放して下さい。そして陛下はいい加減仕事して下さい」

そう言って、グルドさんは持っていた書類のたばを王様の目の前にドサリと置いた。

私がグルドさんと結婚したのは戦争が終わってすぐのこと。まだほんの3週間前だ。だからグルドさんに「奥さん」と呼ばれると、なんだか照れてしまう。まだ、自分が誰かの妻であるという事実に慣れていないのだ。

「さ、行こうチノちゃん」

グルドさんが私の手を引く。書類の山を前に険しい顔をしている王様を残して部屋を出た。

「グルドさん、私お昼ご飯作ってきたんです。一緒に食べましょう」「いいね。天気がいいから外へ行こうか」

緑の芝生が広がる訓練場の端、そこにはえている1本の木の根元に、私たちは腰をおろした。城の裏には様々な花が咲き乱れる美しい庭園もあるけれど、そこは花の香りが強すぎて、ご飯を食べるには少し不向きなのだ。

昼休憩の今の時間、訓練場にひと気はなく、がらんとしている。太陽の光りが降りそそぎ、芝生はぽかぽかと暖かい。

「こっちおいで」

バスケットに入れてきたサンドイッチを出そうとしていると、グルドさんに腰を掴まれ、引き寄せられた。

「わっ」

私の体は彼の足の間に収まる。後ろからグルドさんの腕が回ってきて、ぎゅっと抱きしめられた。

「あー、癒される」

目をつぶって、私のこめかみに頬を擦り寄せるグルドさん。最近忙しいみたいだし、疲れてるんだろうな。

「お仕事大変なんですね」

「まあ、ちよつとね。陛下みたいにワガママな上司とラックスみたいに生意気な部下に挟まれて、中間管理職は大変なのよ」

そう言って、冗談ぽく笑う。

私はラックスさんの爽やかな風貌を思い浮かべて言った。

「ラックスさんといえば、この前女性にひっぱたかれているのを見

ました。別れ話がつれたのか、修羅場っぽい雰囲気で……。大丈夫だったのかな」

「大丈夫、大丈夫。それ、あいつにとっては日常茶飯事だから」

私の肩にあごを寄せ、グルドさんがのんきに言う。

かと思うと、私を抱く腕の力を強めて面白くなさそうに続けた。

「チノちゃんが心配する必要ないよ。ラックスの事なんてほっとけばいい」

顔を近づけてくるグルドさんにキスの雰囲気を感じた私は、

「あの、お昼ごはん食べないと……」

と、サンドイッチに手を伸ばそうとした。

「後でいいよ」

しかしグルドさんは片方の手でバスケットに向かおうとする私の手を絡み取り、もう片方の手を私のあごに添えた。後ろにいる彼の方へ少し顔の角度を変えられる。

外でキスするのは恥ずかしいんだけどなあと思いつつも、私は目を閉じてグルドさんの唇を受け止めた。拒否すると、すごく悲しそうに顔をされるから。

「……んっ」

この国の人たちは情熱的だ。恋人を抱きしめるのもキスをするのも、それは大事な愛情表現の一つ。毎日するのが当たり前とっているらしい。

ここの人たちは、呼吸をするように自然にキスを交わす。

「はッ……」

深い口づけが終わり、お互いの顔が離れると同時に、私は荒く息をついた。キスの間の上手な呼吸法については、まだ研究中だ。頬を染め、とろけた瞳で無意識にグルドさんを見上げる。

しかし、そんな仕草はするべきではなかったと、目の前で妖しく笑った夫を見て思う。

「かーわいい」

一旦離れた唇がもう一度近づいてくる。グルドさんの舌は柔らかく、熱い。

『可愛い』という言葉は、今や彼の口癖になっている。ほんと、目が合ったたびに言われているんじゃないのかというくらい。

だけどそれはもちろん嬉しいことだ。グルドさんに「可愛い」と言われるたび、本当に自分が可愛くなっていくような気さえする。

「……っ」

唇の端からだ液が垂れた。グルドさんは一度私の口内から舌を引き抜くと、だ液を舐め取って、またキスを再開する。

グルドさんのキスは麻薬のように中毒性がある気がする。気持ちよくて頭が真っ白になって、恥ずかしいのに求めてしまう。舌と舌が擦れ合うと、首筋から腰にかけて、ぞくりと痺れが走るのだ。

んっ、と息を吐いて、私は体を後ろへ引いた。名残惜しそうにグルドさんの唇が離れていく。

「……っごはん……食べないと」

艶かしいこの場の空気に耐えられず、健全な方向へ話題を変えようとした。

が、再度バスケットに伸ばした手は、虚しく空を掴んだだけ。昼食の入ったそれは、私が掴むより先にグルドさんに奪われていた。グルドさんは腕を横に伸ばし、私が届かない位置までバスケットを遠ざける。そして、にやりと意地悪な笑みを浮かべて言うのだ。

「このサンドイッチを返してほしかったら、チノちゃんからキスしてごらん」

「私から……!?!」

カツと顔に熱が集まる。今まで自分からキスしたことなんてなかった。私がしたいと思う前に、いつもグルドさんからできてくるから。

グルドさんはバスケットを遠くに置くと、私の体を持ち上げて、ぐるりと反転させた。彼の太ももの上に座って、向かい合うようなかたちになる。

「無理ですよ、私からなんて恥ずかしいです……」

眉を下げてしおらしく訴えてみるが、グルドさんは笑みを浮かべたまま。サンドイッチを人質にとるなんて卑怯だ。

今度は叱るように言った。

「もう！ 子供っぽいことしないでください。早くごはん食べますよ！」

しかしやはりグルドさんは動かない。「早く」と言って、いたず

らっぱく唇を突き出してくる。

「……………」

数秒悩んで、私は覚悟を決めた。

なけなしの勇気を振り絞り、えい！　と身を乗り出してグルドさんにキスをする。唇が触れあっただけの軽いキスだけど、自分からするのはやはり緊張する。

ドキドキと胸を叩く自分の心臓の音を聞きながらゆっくりと顔を離していくと、グルドさんが残念そうに呟いた。

「……………それだけ？」

グルドさんは、もっと濃厚なやつを期待してたのかもしれない。

いつも彼が私にしてくるような深いキスを。

私はむっとして反論する。

「それだけって何ですか！　今でも私すごく頑張ったのに……………自分からキスするのに、どれだけ勇気がいるか……………」

よよよと泣くふりをして、私は両手で顔を覆った。こういうリアクションをしておけば、グルドさんも以後、「チノちゃんからキスして」なんて言ってくる事はなくなるだろう、という安っぽい作戦なのである。

「チノちゃん……………ごめんね。ちょっと調子乗りすぎた。泣かないで」

しかしその安っぽい作戦にまんまと引っかかるのが、グルドさんの良いところでもあったり。全く涙なんて出ていないのに、本気で心配そうに言ってくるのだ。

「チノ、機嫌直して」

そう言ってグルドさんは私の両手を外し、慰めるようにそっと唇を寄せてきた。

……………あれ？ またキス？

「んんッ……………」

今日何度目のキスになるのだろうか。優しくも激しいグルドさんの愛を受けながら、私は考えたのである。

いったい、いつになったらサンドイッチを食べられるのかと。

後日談（後書き）

幼妻が可愛くて仕方ないおっさんの図。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5856z/>

勝利の女神を喚び出せば

2012年1月14日21時50分発行